

# とつぜん胸の奥から

長谷部憲二

きょうもここ多古八のみんなは、快く私を迎えてくれた。大きな赤ちようちんを横目に左手で暖簾を上げ、右手でガラス戸を開けた時、何人かが「おう、来たか」と声をあげた。そのあとに「おや、きょうは子供連れか」という声が続いた。いつものように常連がいる。カウンターのなかではママが忙しそうにしている。それほど大きくはない、ママが一人で切り盛りしている店、居酒屋多古八。

きょう私は、小学校五年生になる息子と二人連れであった。息子を連れて来たのはきょうで二回目である。ただし、初めてここに連れて来たのは息子がまだ歩き始める前のこと。その時は、客がいる時間だとママには迷惑だろうと思い、この店が開く前の四時半頃に来た。五時に開店なので、この時刻ならママだけがいるだろうと思ったのである。開店準備中だったママは、気持ちよく私たちを中に入れてくれた。妻と私は、この時初めて息子を親戚以外の人に紹介したのであった。そしてきょうが息子の二回目の訪問となる。

この店の常連の中で、私はその平均年齢を下げている。下から数え始めたらすぐに私の順番になる。そのこともあって、ほかの常連にはいろいろよくしてもらった。かわいがってもらったのである。独身時代がけっこう長かったが、いざ結婚するとなった時、わざわざこの店の休みの日にパーティを開いてくれて、たいていの見知った人が集まってくれた。そういう付き合いをしてくれる常連にお礼の意味も込めて、息子を紹介するつもりで連れて来たのである。

ここに来いよ、と座敷のテーブル席にいる人が自分の隣を示すが、その人には連れがいて、向かいに座っている。そこで私は、カウンター席の奥の方が空いているのを確認し、座敷とカウンターを左右に見ながら奥に進んだ。

カウンターの奥から二つめの席に息子を座らせ、その手前に私が座った。息子の右側の、いちばん奥の席には、ママの私物かそれともこの店で使用するのかわからないが、大きめの紙袋がひとつ置かれている。その中には、なにやらスーパリーの袋に入った雑駁な形をしたものがいくつか見てとれる。その席の横には柱があって、カウンターはそこで終わりになる。柱の向こうの空間は、電話やら酒瓶やら夏には

生ビールの樽やらが置かれているはずである。それほど混んでいるわけでもないの  
で、いちばん奥の席まで詰める必要はないだろう。そして息子と反対側の、私の  
左側には、会社の大先輩である清水さんが座っている。

ママが、「いつも通りでいいかしら」と言いながらビールとグラス、それにお通  
しを私の前に置いた。そして「あの時の子でしょ」と軽く念押ししてから息子に話  
しかけた。

「ここ、初めてじゃないんだけど、…覚えていないわけじゃないよね。もう小学生なの  
ね、何年生かな」

息子が五年生だと答えると、ママが感慨深げに言った。

「そうかあ、もう五年生ねえ。あれからもうそんなになるのか、はやいものね。私  
も年取るわけだ」

このママの声を聞き、「年取ったのはママだけじゃないよ。僕だってこんなだよ」  
と言って半分苦笑いしながら自分の頭を指したのは、カウンターに座っている森  
山さんである。その頭はぼ真っ白になっている。数年前までは黒い髪の毛が多  
かったはずだが。そしてその隣には、ちよっとうつむいてだいぶん薄くなった頭を  
なでている、バツの悪そうな顔をした大学教授、寺崎先生がいる。

テーブル席からの、「ママはまだ若いよ。いつまでも若いまま」という声の主  
は、いつも元気のいい木原さんだ。ママに「おだててもだめよ。自分のことは自分  
がいちばん知っているんだから。でも木原さんはほんとうにいつまでたっても若い  
時のままね。感心するくらい。白髪も少ないし」と切り返されて、「ママにそうい  
ってもらえるのは、ほんとう、うれしいね」と笑っている。

少し離れて一人でカウンターの席についている竹之内さんが、ママに話しかけた。  
何人かいる女性の常連のうちの一人である。

「でもさ、小学校五年生の頃って微妙なのよね、そうじゃない、ママ」

「なにが微妙なのよ」

「だってさ、それまではかわいい一辺倒でしょ。でもこの年頃になるとね、そろそ  
ろ親の背たけにも近づいてくるじゃない。なかには親よりも背が高い子もいるでし  
よ。するとね、どこかが、そう、若者っぽく見えてくるところがあるのよ。なんか、  
頼もしく見える瞬間があるわけよ。それに、そろそろ反抗期に入っていく時期でも  
あるわけでしょ。あるときに、ふっとその子の姿がそれまでと違って見えてくると

いうことない、ねえ、ママ」

ママは笑顔を浮かべながら、それでもカウンターの陰で手を休めることなく答えた。

「そうねえ。子供を育てると誰でもそんな経験をするのかもしれないわね。あなたもそうやってヨシ坊を育ててきたんでしょ。それも女手ひとつで。私、おせじじやなく尊敬してしまうわ。たいへんだったでしょうに」

「うーん、でもねママ、うちのヨシはもう仕事しているから、いまさら昔はたいへんだったなんて考えることもないわ。でも、こうやって小さな子を見ると、やっぱり思い出すこともあるかな……」

竹之内さんは、右手に持っていたウイスキーのコップをカウンターに戻した。そして、目の前に置いてあったタバコの箱を左手で持ち、その中からゆつくりと一本取り出して、その一本を確認するように見つめてから口にくわえた。ママがライターを差し出そうとしたのを軽く手を振って断り、灰皿の横に置いてあった使い捨てライターで火をつけた。細身のタバコである。火をつけたらすぐに、軽いメンソールの匂いが伝わってきた。

灰皿には四、五本の吸い殻が、どれもみなフィルターのところで軽く折り曲げられた状態で入っている。火をつける前のおよそ半分くらいの長さである。

このとき、コップの中の氷が崩れ、ガラスの壁面にあたってカランと乾いた音をたてた。竹之内さんは左手のひじをカウンターにつき、その手のひらにアゴをのせて、その氷が動かなくなるまでジッと見つめていた。そして氷が動かなくなると、自分の吐きだしたタバコの煙の行く先を見ている。どうやら私の息子を見て、自分の子供が同じような年頃だった時の子育て奮闘記を思い出してきたようである。一人で、仕事をしながらヨシ坊を育ててきたのである。何かしら思うところはあろう。

ヨシ坊とは何度かこの店で会ったことがある。小学生の頃に一人で入って来て、「お母さんが、仕事が遅くなるからここで待ってろって」と言うなりカウンターに席をとり、食べ物を頼むのを何度か見かけたこともある。竹之内さんがどういう事情でご主人と別れたのか、あるいは死別だったのか、誰もわからないし聞こうもしなかった。ただ、ヨシ坊と二人で一生懸命な暮らしだということは、みんなが理解していた。

ママから息子にもお通しを出してもらい、味はどうかと聞くと、とてもおいしいと言う。ふだん家では食べることがないものなのでいつそうおいしく感じるのだろうが、このお通しをおいしいと言えるなら、将来私のお酒の相手をしてくれそうだ。ママ特製の塩辛に大根おろしをかぶせて、その上に白子をのせたもの。

そういえば、妻もこの店で初めて白子を食べたと言っていたな。そして、おいしかったからと言って、スーパーで白子を買ってきて自分で作ってみたりしていた。何度か作ってみたあとで、結局同じようにおいしくは作れないからとあきらめて、それつきり白子を家で食べることはなくなったっけ。白子自体には味はないはずだけれど。

少し時期がずれているが、おでんを息子に出してもらった。ここ多古八では、一年中おでんを出している。薄口の味付けだが、充分に中まで染みているからおいしい。暑い盛りでも、お酒を飲んでいるとつい食べたくなってしまふ。焼き鳥も何本か焼いてもらった。息子が喜んで食べているのがうれしい。

「はい、これは私からのおごり。味付けは薄くしてあるから、濃い目がよかったらお醤油をかけてね」

ママ特製のチヂミが出た。ママはときどきメニューにないものを作って、店にいる客みんなに少しずつ配っては、その反応を見て喜んでいる。このチヂミもそのうちのひとつで、メニュー外のものとしては定番に近い。

時には常連の誰かが持って来たお土産をみんなにふるまう。

「もらったものは私のもの。だから、これは私からのおごり」

これは、そういう時にママが言ういつもの言葉である。だからそのお土産を持ってきた人は、「お礼を言うのは、私ではなくママにね」と言う。そういうお土産の中で、たまに珍しいものが出ることもあるが、その時は、常連であることの役得という気分になる。もちろんその時に居合わせた客全員がそのおすそ分けにあずかることになる。そして当然ながらママは最初に味見を済ませている。

後ろから声がかかった。

「ねえ、息子さんを紹介してよ。小学五年だって。うちのは女の子だしもう高校生だから、生意気にしか見えないけど、やっぱりかわいいわね。あら、失礼だったかしら。ごめんなさいね。でも、すっごいお父さん似ね。いい男になるわよ。いいなあ、これくらい年の男の子がいるのって」

いつもなら軽く茶化して言い返したりするのだが、きょうは息子のいる手前、あまり変な物言いになってしまっただけという気がして、簡単に「ありがとね」と言うにとどめておいた。

その女性と一緒のテールについていた村山さんが、もう一人の女性を通して私に写真を一枚よこしてきた。

「今度の写真はどうかね。だいぶん自信があるんだけど、プロの写真を見てきた目ではどうかね」

山の写真である。険しい谷を挟み、二重三重に重なりあつてつながる山々を、山裾にひろがる田んぼの中から撮ったようだ。緑濃い近くの山からぼおつと霞む遠くの山まで、成長し始めたイネを手前にして構図よくおさめている。廃屋らしき家がアクセントになっている。

「よく撮れてますね。この家が写真全体のイメージを引き締まったものにしてますよ」

「そうだろ、そうだろ。その家がよくて撮ろうと思ったんだから」

「この写真だったら、引き伸ばしてもサイズに負けない一枚になるんじゃないですか」

「君もそう思ってくれる？ この写真は、大きくしてこそね、そのよさが出てくるだろうと思ったんだ。そうか、そう思ってくれるか。そりゃあよかったな」

名前を言えば誰でも知っている鉱山関係の会社で、ついこの間まで副社長を務めていた人だ。引退したのはごく最近だが、現役の頃から写真に凝り始め、気に入ったものは額に入れてこの多古人に飾っている。私が印刷会社に勤めているのをいいことに、プロの写真を見慣れているだろうからと批評を求めてくる。それに対して私は、自分の思ったことを遠慮なく言っている。特に写真に詳しいわけではないし、相手も素人こつちも素人、たとえどこかのはずれな言い方になったとしても何か責任を負うわけでもないのだから、気楽に好き勝手なことを言っている。

村山さんが写真を始めて少し経った頃、周りが写真集を出したらと勧めるようになった。会社関係の人だけでなく、この多古人の常連にも勧める人がいた。だが、私は勧めるまでの気にはなれないでいた。写真集として見るには何か足りない気がしていた。村山さんは、私のこのような気持ちを感じていたのかもしれない。だいぶん乗り気になって私にもそのための意見を求めてきたりしていたのだが、しば

らく前からはそういうことがなくなっていた。それでも時々、新しく撮って来た写真をここ多古八の店内に飾り、皆に見てもらっては喜んでいいる。

今は、向かいに座っている女性二人に、最近撮った写真だというのを自慢げに見せている。まあ、一般人相手に充分に自慢できるレベルではあるだろうと、私は思っているのだが。

「ねえママ。このあいだ、僕の奥さんが来たでしょう。僕を迎えに来たという理由で」

森山さんがママに言う。そういえば私も記憶している。入って来た時からいつもの様子が少し違うので、森山さんに、「きょうはどうしたんですか」と聞いた時のことだった。もうすぐ奥さんがここに来るんだと話してくれたっけ。なんとなく、奥さんに頭が上がらない森山さんを見たような気がしたもの。で、その奥さんが店に入って来ると、「これが僕の奥さん。みなさんよろしくね」と言って照れながら二人仲良く並んで飲み出したのだ。これでも超一流企業のグループ会社の東日本支社長という立場の森山さん。

「あの時ね。実は僕の奥さんは、この店の偵察に来たのよ。僕がしょっちゅうこの店に来るもんで、どんな店なのか探るつもりで来たんだよ。別に浮気、今の言い方だと不倫かな、まあどっちでもいいけど、不倫をしているわけではないから来ることもないだろうと言っただけど、どうしても言っけなかつたのよ」

「あら、それくらいのこととはわかってたわよ。ねえ」

ママがカウンターの何人かに同意を求めるように顔を回しながら答えた。

「で、どうだった、奥さんの採点は。合格点とれてたのかな」

「それがもう、満点よ、満点。思ってたよりずっといい雰囲気のお店だって。お客がみんな紳士的ですてきな店だって。おかげでこれからも僕は、堂々とこの店に来ることができるよ」

「あら、よかった。じゃあまたこんど奥さんを連れていらっしやいな」

「うん。でも、連れて来るのもいいけど、やっぱり一人の方が気楽でいいな。一人で来ることにするわ。そうさせてよママ」

森山さんは水割り用の氷と水をママに頼んだ。ウイスキーのボトルはまだ半分以上残っているようだ。もうしばらくゆっくりしていくつもりだろう。

妻はほとんど酒を飲まない。だから、二人で外の飲み屋でゆっくり過ごしたいと

は思っても、できるわけではない。一緒になって間もない頃にこの店に二、三度来たことがあるが、それきりだった。私には一人がいいとか夫婦連れがいいとかはよくわからない。

「こんばんは。おや、今夜もみなさんお揃いかな」

こう言っただけで来たのは、これも常連の北野さんだ。北野さんはこの多古八が入っているビルのオーナーでもある。声が大きくて、酔った時の笑い声はもつと大きくて、笑っている時の北野さんをみんな気に入っている。

「あれ、久しぶりの人がいるよ、それも子連れじゃあないか、ははは」

みんなにあいさつしながら私の横に来た。この店に来るタイミングが悪かったのか、私はこしばらく北野さんと会っていなかったような気がする。

「子供をこんな小さいうちから夜遊びさせたらだめじゃないか。それとも、今のうちから教育して、大人になったら一緒に飲み歩こうという魂胆か、ははは」

まあゆつくりしていけよと言いながら私の肩をポンポンと軽くたたいて、自分のウィスキーボトルと水割りセットをカウンター越しにママから受け取り、村山さんの横に座った。「どれ、こんどはどんな写真なんですか」と、さっそく村山さんの写真の批評に入っている。

常連が時々息子を好意的な目で見てくれている。連れて来てよかった。

お前の父親がどんな仕事をしているのか、そんなことは話をすればいい。サラリーマンなんだから。でも、家で見る父親と違った父親がいること、家からも仕事からも離れた父親がいることを知っておけ。ただ仕事をしているだけの、そしてお前の父親であるだけの父親ではない、一人の人間として過ごしている父親の姿を、その一部をどんな形でもいいから見えておけ。

ほんとうに、連れて来ることができてよかった。

清水さんは話を続けた。

「あの時、実は静岡の方の病院に行っただけ。誰にも言わなかったけど。その病院で手術をしたんだ。昔の友人が紹介してくれた病院だったんだけどね。それで、手術をして出てきたのが、なんか糸のような、紐のようなものだったよ。それをみていると、こんなもので苦しんでいたのかと思うとなんだかおかしくなってるね、笑ってしまったよ。」

そう言っただけで、こんな長さだったと、右手の親指と人差し指を大きくひろげて私と

ママに見せながら、軽く口をあけて笑っている。

しばらく前に清水さんは、体調が悪いとのことで二か月ほど会社を休んだことがある。ゆつくり静養すれば元に戻るからといって、休んだのも病欠ではなく年休という届だった。職場の人は誰も詳しいことを知らされていなかった。その時の話である。今はもう完全復調して、以前と同様とまではいかないにしてもしよっちゅう飲んでいると本人が言う。

そうだ、私がこの店を知ったのは、この清水さんが連れて来てくれたからだった。新入社員だった私を、二十年近くも先輩の清水さんがいろいな店に連れて行ってくれた。いい飲み方をする人だった。上品にかたよらず、俗であつて野卑に落ちずという飲み方だった。私は清水さんの、金魚のフン、' になっていた。会社のあるこの街に限らず、池袋の店にも連れて行ってくれた。

その池袋で、繁華街のはしっこにある店に行った時、「ここの店の店は、だれかから紹介されて知っているのでなければ入らないように」などというふうにも教えてくれた。その時に入った店に、後に後輩と二人で立ち寄った時は、入った初めのうちはママとマスターは訝しげに私たちを見ていたが、清水さんの名前を出したらとてもあたりの良い態度になったことを覚えている。

どこの店に行っても清水さんは常連として迎えられていた。この多古人もその中のひとつだった。

しばらくして清水さんとは仕事の部署が違うようになって、連れ立って飲む機会が自然に少なくなっていくた。私は、この多古人がカラオケを置いていないのが気に入って、一人でもこの店に来るようになっていた。

そういえば、その後清水さんはどうしたんだっけ。

そうだ、清水さんはもういないんだ。病気でずいぶん前に亡くなっていたんだ。

あ、あ、あ！ とつぜん胸の奥からこみあげてくるものがあった。そして、どこからか声が聞こえてきた。

「もう、いいんじゃないか」

こらえきれなくなつて、私は両手で顔を覆った。隣の息子はカウンターに突っ伏して眠っている。私の様子をこの息子に知られることはないという思いが、ますます私の心を解放してくれる。ついに私は声を上げて泣き出してしまった。こみ上げてくるものを胸の中のいちばん上でなんとかおしとどめておこうとしても、今はそ



こを突き抜けて嘔き出してきている。

どンドン嘔き出してくるにまかせて、私は泣き続けた。いくら私が泣いても、多古八の店内はいつも通りにみんなてんでに笑い、飲み、話をしている。変わらない、いつもと変わらない……。

そのうち、私が泣き続けるに従って、いつもの多古八の店内がフェードアウトしていった。フェードアウトして小さくなって行って、ついには消えてしまった。それでも私は顔を覆ったまましゃくりあげていた。

そうだ、もう多古八は無いんだ。とつくに無くなってしまっていたんだ。ママが亡くなって店も無くなった。マスターが亡くなってからママが一人でがんばっていた店、多古八。息子をこの店とこの店の常連に紹介しようと思っていたが、それが叶う少し前に店は無くなっていったんだ。

でも私の記憶の中からは決して消えない。いつでも私は多古八である常連たちと一緒にお酒を飲めるんだ。暖簾をくぐってガラス戸を開けて中に入ると、いつもの連中が、「おう、ようやく来たか」と迎えてくれるんだ。今でもそうだよ、みんな。どうしているんだ、みんな。

「ああ、おじいちゃん、こんなところにいると体に悪いですよ。いつもおじいちゃんは手足の関節が痛いって言っているでしょう。夜風にあたったらますます痛くなりますよ。わかりますね。さあ、帰りましょう。おじいちゃんの大好きな孫たちが、心配して待っていますよ」

そうさ、わかっているよ。私はまだすっかりしているよ。自分で帰れるよ。ただ、少しだけ昔のことを思い出してもいいだろ。今は用無しなんだから、せめてみんなのじやまをしないように、まして息子の嫁さんのおまえさんには迷惑をかけたくないから、こうやって夕方には外に出るんだ。

「おじいちゃんの自慢のひとり息子がそろそろ帰って来ますよ。自慢の息子に文句を言われたくないでしょ。家に戻って、ちゃんと自慢の息子の帰りをお迎えしましょうね」

公園のベンチに座っていると、この時間はどこからコトコトと包丁を使う音が聞こえてくることがある。どうかすると、お酒を飲んでいる様子が窺い知れることもある。そんな時に少しだけ、少しだけ昔を思い出しても、罰はあたらないだ

ろ。

私にだって元気だったころがあったんだ。せいっぱい仕事して、帰りに多古八に寄っていつもの仲間と飲む、そんな毎日が続いていた頃があったんだ。それが今は、今は……。

そうだ、こんどあの、多古八のあった場所に行ってみよう。今はどうなっているか、見てみよう。あのあと会社も無くなって、あの街に行くこともなくなった。でも、多古八はなくなっても、あのビルはそのままあるかもしれない。そうしたら、別の店が入っているだろう。そして、あの頃みんながその店にいるかもしれない。そうだ、きつという。そして、私がまた暖簾を上げてガラス戸を開けると、「おう、ようやく来たか、遅かったな、待っていたんだぞ」とみんなが声をかけてくれるんだ。「奥さんは元気か」とか、「息子さんはいくつになったんだ」とか聞いてくるんだ。ママが、「いつも通りね」と言っつてビールとお通しを出してくれて、そのままお酒も用意して、「ぬる燗でいいよね」とお銚子をお湯の中に入れるんだ。そしてまたあの寺崎先生がいたずらして、私が別の人と話をしているすきに私のおちよこの中に焼酎を入れて知らんぷりをしたりするんだ。みんなに人気のある東北出身の女性、羽田さんが、「今度私と二人だけで飲もうね」などと私を誘ってみんなに笑われている。そして他の人に、「僕とはデートしてくれないの」と言われて、「あなたとのデートはその次の次よ。予約している人が済んだらデートしてあげるからね」と切り返している。そしてみんなドツと笑い合っている。そんな多古八で、あのみんなにまた会えるんだ。そうだ、そんな多古八に行こう。行かなければ。だってあの場所に多古八はあるんだから。行けばみんながいるんだから。そして私を待っていてくれるんだから。きつとみんなは快く私を迎えてくれる。きつと、きつと……。